

嵐牛

友の会便り

第八号

2017.4.4発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛蔵美術館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

目次

- [1]昔は年末が忙しく
今では年度末が忙しい
伊藤鋼一郎
- [2]柿園友垣抄(七)
加藤定彦
- [3]鈴木貫一家の嵐牛資料
倉島利仁
- [4]講読・鑑賞の会
今後の予定
- [5]嵐牛蔵美術館 近影

昔は年末が忙しく 今では年度末が忙しい

伊藤鋼一郎

年末を師走と言い、特別忙しいとは思えない師匠（先生）でも暮れには走り回るくらいと言われるように、昔は暮れに一年のまとめを行っていました。現代では学校を始め役所関係、企業すべてが三月末を年度収めとし一年間の締めを行っています。私の本業も役所仕事がほとんどで一年間の納期を三月に設定され受注しています。平成二十八年度の締めがこの三月でした。我が事務所は平成二十八年度、事務所としては過去最大の大型物件を四つ受注していました。事務所所員一同で頑張っている中、私はダウンしてしまい四週間も仕事になりませんでした。仕事は息子始め所員一同が頑張って処理してくれ何とか検査も通過し検査済証も頂くことができました。幸い私はゆっくりさせて頂いたおかげで、元氣を取り戻し平常の生活に戻ることができました。そろそろ本業の方は引退の時期が来ている様で！

例年ですと本日（四月一日）は桜が満開かもしくはすでに散り始めている頃かと思いますが、今年は今全く咲いていません。だいぶ春めいてきて春の長雨の時期に入ってきています。雨だけは一日おきくらいに降っています。筍も少しずつ顔を出してきています。若いころには二月半ばより竹藪に入り筍の出そうなどころを事前に鍬で削り、筍が出てきたとき解かりやすくして置きました。二月に上根に出来た筍を収穫していた年もありました。体調がすぐれない中、気休めに竹藪を削っていると上根に鍬が当たり四つの小さな筍が顔を出しました。面白いので記念撮影をしました。

（「嵐牛・友の会」会長）



上根に連なって顔を出した筍

この位の大きさが美味しいようです

柿園友垣抄(八)——森出杖と「ヲ、口琴」——

加藤 定彦

嵐牛の門人達の名簿「柿園門人録」(仮称)は、門葉の形成過程を知る基本資料である。キャリアの古い加藤鳳嶺や加藤知碩は見えず、嘉永七年(一八五五)の入門者をもっとも早い。嵐牛はその年三月、山名郡中野(磐田市豊浜中野)に出杖、鳳嶺と

留主しらすまでのしまりや花の木戸

ひと声きりに啼ぬ鶯

嵐牛

鳳嶺

以下を両吟したのを手始めに、四月にかけて同村の知碩(知石)・秋野竹明、隣村福田の大竹晴笠(岩清)・春谷兄弟、八月には中野を再訪、鳳嶺・知碩・竹明とそれぞれ両吟、その後、城東郡岡崎(袋井市)に足を伸ばして鈴木貫一を訪ね、

秋風や下りて山の高さしる

嵐牛

羽音するどにわたる隼

貫一

以下を両吟し、九月に入ると豊田郡二俣(浜松市天竜区)に杖を曳き、塩崎石翠・米山石坡が入門するなど、後に四天王と称される有力門人らの大半をこの年までに獲得する。

以後、明治三年(一八七〇)までの入門者数一覧表を参考までに示すと別掲の通りで、慶応二年(一八六六)が突出して多く、翌三年と明治二年がそれに続く。残念ながら、慶応二年分の『俳諧どめ』は欠本で、連句指導の実態を確認することは出来ない。

*

翌三年の『柿園日記』を読むと、三月八日の記事に、待ちわびた森連中の使いの者が来て催促、翌九日に発杖、戸締峠まで出迎えを受け、駿嘉亭(前年入門)に泊まる。

翌十日から連日大勢が参集、深更まで連座、九名が入門。十六日には、芭蕉追福会「花供養」が催され、先の九名に前年入門の五名と近隣門人が加わり、「凡十八人」で朝から

年次別入門者数一覧

嘉永7年・1854	7名
安政3年・1856	4名
安政4年・1857	5名
安政6年・1859	3名
安政7年・1860	5名
万延2年・1861	5名
文久3年・1863	1名
元治元年・1864	3名
慶応元年・1865	3名
慶応2年・1866	27名
慶応3年・1867	14名
慶応4年・1868	9名
明治2年・1869	15名
明治3年・1870	2名

深更まで大賑わい、翌十七日は「夜べ(昨夜)の勞れにて終日眠、夜まで臥」。その頃には聞きつけ、近隣から評卷や聯の揮毫依頼など、多忙を極める。

二十一日には森連中三人を同伴、久能(袋井市)の可睡齋に遠出、参詣の帰途、村松古山亭の牡丹を見に寄り、歓待の上、句を望まれて詠む。

二十六日、二俣の門人石翠(前出)が来泊、曳杖を懇請される。二十八日、その二俣連中三人の句巻が届き、即評。翌二十九日、漸く帰庵する。

*

翌慶応四年、戊辰戦争が起き、二月二十三、二十四両日、薩州・長州、尾州・紀州の軍勢が下る。ほか前年と同じで平穩裡に消光。三月七日、森に発杖、駿嘉亭に泊まる。九日に平宇(袋井山下山梨)から足立水音・尺波が来て高杉晋作の激越な漢詩(七絶)を見せられる。

十三日、「花会(花供養)」の開催案内状を東西に発し、十七日の当日には見付の杜水が宗匠、丹野(菊川市)の富士丸が執筆を勤め、中野から知碩、中善地から十湖も参加、老若二十名余で夜を徹し、五十韻を満尾する。

三十日、昼頃、在所(家)から迎えの者が来て、日没後帰庵するが、留杖中五名の門人を新たに加え、森の柿園門はいよいよ活況を呈したのである。

*

さて、日記で特筆すべきは、十五日の「ヲ、口琴といふ、一圭子持とて持来。音、いとよし」という記事で、辞書や参考文献など何を調べても判らなかつた。ふと、「嵐牛文集」に「須磨琴ノ辞」の一篇、

一絃琴は行平中納言の須磨の浦に左遷給ひし折から、わびにわび給ひし折々のこゝろやりまでの手づさみより起れりと。云々

があることを思い出した——嵐牛蔵美術館には自筆の半切が伝存、比較すると「嵐牛文集」には脱落がある。

一絃琴 須磨琴は、近世後期、国学とともに盛んとなり、幕末期には坂本龍馬ら勤王

の志士に愛好され、稽古会が密議のカムフラージュに利用された(宮尾登美子著『一絃の琴』)。素朴な構造で、もとは古歌や催馬楽から歌詞を採り、もっぱら精神浄化・慰藉のためのものだったが、幕末期に流行ると、俗曲などの外曲も演奏される。

明治期の演奏家徳弘太霖の流派では、調絃を主に志越、または断金(十二律でいう「大呂」)に合わせるというから「大呂琴」と称し、それが「ヲ、口琴」と湯桶読みされたのではないか——ちなみに、マレーシアに大呂琴院という琴の音楽院が現存する。

徳弘太霖はもと土佐藩士。会津戦役に軍楽隊として従軍したというから、この頃、塩井川原の東海道を演奏しつつ通過したかも知れない。

(嵐牛・友の会 顧問)

鈴木貫一家の嵐牛資料

倉島利仁

嵐牛四天王の一人、鈴木貫一のご子孫をお訪ねした経緯については、「嵐牛友の会便り」第五号の「柿園友垣抄(五)——始発期の鈴木貫一——」に詳しいが、その後、改めてお伺いし、掛け軸の類いを拝見する機会を得た。そこで見せていただいた嵐牛の筆跡三点をここに紹介したい。

嵐牛筆の掛け軸の一本目は、外題に「芭蕉翁画像 讚嵐牛 画一丘」とある通り、一丘画の芭蕉像に、嵐牛が芭蕉句を讚したものだ。



はせを翁

けふばかり人もとしよればつしぐれ 嵐牛謹書

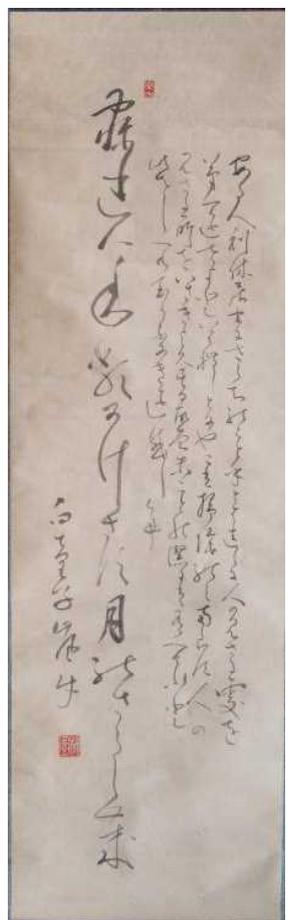
嵐牛蔵美術館に収める芭蕉像の全てにこの句が讚として記されるのは、十月に催される翁忌(時雨忌)の際に掲げられたものだからだろう。画者の大久保一丘は横須賀藩の御用絵師。諱は好古、好徳。字は敏夫。通称惣次郎。ほかに伯隣、王江菊とも号した。「真人図」と称される洋風人物画を残したことで有名である。安政六年(一八五九)十一月十日没。

二本目は、外題に「嵐牛先生筆」と墨書されている。

ある人、利休居士にさうちのことをとほれしに、人の見ざる処を第一にせよといはれしとかや。こは掃除のみならず、人の見ざる所をいさぎよくするこそまことの潔には有べけれど、此をしへの至りふかきに感じて

寝ればねるかげさす月のさうじ哉 白童子嵐牛

茶道の第一人者千利休の言葉の深さに感じたという文章に付した句は、態度が悪いと影も悪く映るとの含意で、障子に掃除を掛けているのだろう。ほぼ同内容の文章は、『秋季句集草稿初編』に見ることが出来る。これは、嵐牛高弟の一人兵藤



平台が嵐牛遺句集編纂のため、嵐牛発句を四季別に収集、浄書した写本である。

ある人、利休居士に掃除の事をとほれしに、人の見ぬ処を第一にせよといはれしとか。げに：おもしろき教なりけり。こはさうぢのみかは、人の見さうな処をいさぎよくするこそ、誠のいさぎよきには有けれどおもほゆる折しも、幼童常吉、一ひらの紙もて来り、是にももの書てよとこふ。其心ざしのやさしさにいふ。ゆめ主意に背ことなけれ、勤におこたるなけれ、我意に慕事なけれ。かの居士が示されたるごとく、人の見ざる処を第一にせよ。

月に恥よこ、ろに雲のおこるとも

こちらでは、文章後半に幼童常吉に教訓した文章を書き与えた旨が添えられ、発句もいささか教訓めいた内容となっている。

三点目は、外題に「画賛 嵐牛先生筆 画邦岳」とあるように、邦岳の描いた花と子犬の図に嵐牛が讚したもの。



葛水や味も覚ぬ初手ひとつ 白童子嵐牛

「葛水」は葛粉と砂糖を湯で溶いた葛湯を冷やした飲み物で、夏の季語。句は、乾いたのどを潤す葛水は味が淡泊で、一杯飲んだだけではその味がよく分からないとの意。最初の一杯を「初手ひとつ」と表現した。花に遊ぶ子犬の絵は、まだ未熟でこの世のことがよく分からない存在として、句と響き合わせたのだろう。ただし、「邦岳山人」と署名する絵師については未詳である。皆様のご教示を願う。

(「嵐牛・友の会」幹事補佐)

講読・鑑賞の会 今後の予定

第十一回 四月十六日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 嵐牛の俳文について 加藤定彦先生
石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読

第十二回 六月十八日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 嵐牛蔵美術館所蔵資料の鑑賞
石川依平「宇津の山越」講読
「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。



嬉しそうな囁りの先には 満開の木瓜の花
遅れている開花 ユキヤナギ・レンギョウと共に春を告げ

平成二十九年四月二日 撮影

事務局 伊藤英子